

若紫の思念

村井利彦

(一)

「有っても無くても何等の相違の現われない要素は、全きものを作る所の眞の分子ではない。要素のどれ一つでも、所を変え、もしくは引き抜かれたならば、全体は支離滅裂するように組み立てられねばならぬ」とは、もちろんアリストテレスの言葉（『詩学』）である。『源氏物語』の初期、つまり桐壺から紅葉賀に至る、帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花の五巻のおりなす空間的ならみ以上にこの言葉を引き立てる事例はなからう。

ちなみに言えば、桐壺更衣は藤壺女御のために、藤壺女御は若紫の少女のためである。若紫の存在は、先行の二つの祖型の挫折がなければ意味などない。空蟬と夕顔は硬軟両様の対極にあつて靈妙な平衡に達している。原点の位置に軒端萩という凡俗がある。彼女の意味はその豊富な肢体で瘦身の空蟬をきわだたせることにあるのではない。垣

間見の光源氏の目を共にする読み手に、空蟬をして日常普通の女とならべて見せしめる点にある。光源氏の経験を超えた空蟬は光源氏の経験どおりの軒端萩とならべ置かれることによつて、その意味を二重に語られるのである。この図式は、次巻夕顔にもそのまま適用されよう。経験の範疇に六条の女、外にはもちろん夕顔。身分の差はたまたまのものであり物語の空間では問題ではない。もっとも作者は、六条の女の邸で中将なる女を朝顔の場面で登場せしめ、夕顔の社会的な身分、つまり六条の女に対する相対的な位置を明示している。夕顔巻末で、夕顔の履歴が明かされ、彼女の父が中将であつたという記事の意味するものは、夕顔がもし六条の女の邸に仕えれば、中将なる女となるということではなからう。が、その実体はともかく、夕顔は六条の女の如き意志によつてとり殺される結果となるのであつてみれば、身分差など愛の領域にもち込む野暮さは自明だろう。物語が経験の外を照らしつづける限りにおいて、軒端萩や六条の女、さらにいえば葵上はワキものである。彼等が物語の世界で市民権を得るためには、高貴なもの

にあるまじき行為に出るほかない。光源氏は腕の中の空蟬に「その際々を、まだ知らぬ初事ぞや」と言い、夕顔に没頭する自己を省みて「何処にいかうしもとまる心ぞ」と思った。空蟬も夕顔も、光源氏にとつては「初事」なのであって、これは末摘花も例外ではない。読み手は、光源氏の目を共にして『源氏物語』の世界を歩きつづける限り、空蟬も夕顔も末摘花も現われる毎に新鮮な存在、つまり「初事」なのであり、見馴れた光景ではない。たとえ、自分の実家のあたりが描写され、六条あたりの荒れた院の伝承が巧みに表現され、そこで同僚としか思われぬ可憐な女性がとり殺されたり、当時誰でも知っていたかもしれないぬさる高貴な醜い姫君の赤鼻が出て来ても、である。

経験の外なる事例が内にとりこまれ、同化し、しかるべき位置に案配された時、その事例の物語的生命は終る。空蟬は夕顔の登場によって終り、夕顔は末摘花の登場によって終る。空蟬は、その老夫が「夕顔巻」に船旅で黒く陽に焼けた姿を現わした時、全然日常性に還元され、全く対照的な夕顔の愛の形のために『源氏物語』世界から押し出されてしまう。その夕顔は他動的な死によって、あたかも桐壺更衣が桐壺帝にそうした如く、光源氏の中に強烈な印象を残して去る。が、一卷おいて設定されたほぼ同じ状況に踏み込んだ光源氏が、「夕顔の夢」を徹底的に打ち砕く末摘花の、支離疏の如き風貌に出逢うことによつて夕顔は四散する。光源氏の内面はともかくとして、「末摘花巻」の巻末における、光源氏と若紫の少女との「赤鼻の戯れ」の場面を前にした読み手には、夕顔の夢にこだわる理由はない。夕顔はすでに遠い人、言うなれば、赤鼻のかなたに消えた女、である。

(二)

藤壺の場合についてみよう。彼女の、若紫巻における、ぬきさしならぬ登場は、一見唐突に見える。しかし決して不自然ではない。なぜなら、桐壺巻末に彼女への光源氏の憧憬が点出され、兩夜品定め論議が次に置かれ、そして空蟬の苦悶の軌跡がこれに密着しているからである。

兩夜の品定め論議を、中流女性登場のための瀬踏みとする受けとめ方は正統派のものである。が、そう考えてゆくと空蟬が、帚木巻で「帚木」であり空蟬巻で「空蟬」である作者の操作が見失われよう。彼女は帚木巻において「あるかなきか」の帚木であり、空蟬において「しのびしのびにぬるる袖」の女である。なぜ幻の木である「帚木」がここにわざわざもち出されたのか。そしてこれを空蟬の名とし、あまつさえ巻名としたのか。この疑問は、帚木巻に一瞬のためらいもなく接続している短い空蟬巻の存在そのものの疑問につながっている。なぜ、この短い巻は独立せしめられたのか。なぜ帚木巻に組み込まれなかったのか。なぜ、品定め終了以後の場面をとり込んで厚さを調整されなかったのか。

私はこの問題にあまり立入りたくない。すでに「帚木三帖仮象論」で試みた問題であるからである。簡単に言えば、兩夜の品定め論議で浮き上ってくるのは理想の女、藤壺の影像であり、帚木の巻における空蟬の行動は、藤壺の影であるという読みである。つまり空蟬は、遠くから見ると確かにそこにあり、近づくと消え失せる信濃の園原の

「帚木」の如き存在であらねば、前の品定めの論議となつがらぬのである。この帚木の発想は、巻名にそうあることによつて、雨夜の品定めの論議にも色濃く影をおとすはずである。この論議の本来の目的を帚木のようにぼかし、また、ぼかすことによつて、かえつて強烈に、桐壺巻末の「理想の人」をきわ立たせ、すぐその後に関連する人妻の登場でもつて、さらにそのイメージを藤壺に確定し、あわせて、帚木巻全体をして、描かないで十分に語る藤壺の巻としてしまふダイナミックな構成を作者は目指したのだ、と考へるのである。

光源氏が、まだ初事の、中の品の世界に繰り出すという興味津々たる表層の陰に隠れたこの深層構造こそが巨大な源氏物語をつき動かしている根源の棲む場であらう。

空蟬は次の短い巻で空蟬になる。彼女から藤壺という憑物が落ちる。夏の日の宵、火影の中に見えた彼女の風貌は絶対に藤壺のものではない。光源氏が彼女に惹かれたのは、ひとえに拒絶されたが故であり、母の夢想に根ざす藤壺の場合のような深みはない。次巻で、没頭する対象が出来れば、男の意地も面目も無きに等しい。言うなればその程度のものでしかない。だから、寸前にして身をかわしたこの巻の彼女の本能的行為が、結果として彼女の人生の選択、つまり頸の太い伊豫介との結婚生活の枠内の人であるとする選択を決定する時、読み手の側からみれば、彼女がとつたというよりとらされた決定に、ある種の説得力を認めることができよう。この巻の視点が、帚木三帖の額縁に相当する帚木巻頭の口上と夕顔巻末の弁明に負うところが大きければ大きいだけ、彼女のとる反光源氏の行為の重さの程は、他にさうい

行動に及んだ人物が三帖の中で描かれていない分だけ重いのだと考えられるからである。が、しかし、「生絹まきなる単衣を一つ著て」衣服からすべり出た後の彼女はただの受領の妻にすぎない。彼女の意志はともかく、光源氏にもはやかつての情熱はない。そして、愛する夕顔を荒れた院で失つたことでおさら昂じた夕顔への愛の中で、夕顔と最も近い空蟬の占める場は考えるだに悲劇的である。彼女は、自身あまり好いていたとは思われぬ伊豫介、彼女を熱愛する老夫について任地へ行く。光源氏は、かの夜の小桂を返す。これ以上の訣別はない。自然な流れの中の退場劇である。

空蟬は、帚木巻で藤壺のイメージをひたすらにかきたて、空蟬巻で自己を強烈に主張し、夕顔巻で事敗れて去る。関屋巻で再登場する時、彼女はさらに徹底して受領の妻であり、その悲劇の構図は一段と深まりを見せるが、今はそれを語る時ではない。

(三)

若紫巻の藤壺の記事に近接し、周辺を吟味してみよう。

若紫巻は、もちろん女主人公紫上の登場の巻であり、発見から掠奪婚まで一貫して若紫の少女に焦点が合わされているかに見える。表層はあくまでさうであらう。が、深層は違ふ。帚木巻における方法は、この巻においてはもっとあらわである。深層はその全容を表示し、表層を飲み込むようにさえ見える。

光源氏が垣間見をする。空蟬の時のようにである。が、彼の見たも

のは、目が腫れ鼻の格好の悪い女ではない。「限かぎなう心をつくし聞ゆる人に、いとよう似奉れる」雛型である。その雛型も他人の空似などというものではない。僧都と対面し、少女の素性に光源氏が探りを入れた時、僧都の口から「兵部卿の宮」の名が出る。桐壺巻で、母后の死後、藤壺の入内をすすめた親王みかどの名である。

さらばその子なりけり、と思し合はせつ。御子の御筋にて、かの人にも通ひ聞えたるにや

の、「かの人」は、もはや読み手にはダメ押しおしの響きがしよう。正確に言えば、この瞬間、兩夜の品定めにおける黙して語らぬ光源氏の胸の内が確定し、帚木における空蟬の役割が決定的なものとなる。と同時に、この巻が首巻と結合し、混乱した帚木・空蟬・夕顔の三帖に秩序をもたらし、彼等の独立した読み物としての面白さのもたらす不安を解消する方向付けをする。そして、いよいよ藤壺が、この若紫巻の中間点で登場し、里に下った彼女に光源氏が王命婦を介して逢う場面、宮もあさましかりしを思し出づるだに、世とともものおもの御物思なるを、さてだにやみなむ、と深く思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとてうちとげず、心深くはづかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させ給はぬを、なか斜なかのめなることだにうち交り給はざりけむ、と、つらうさへぞ思さるる。

の前半が空蟬を型どり、後半が夕顔を髣髴せしめる時、先行の巻々の意味はますます明確なものとなる。作者は藤壺の胸の中を空蟬で、藤壺の底知れぬ魅力を夕顔で描いて見せたのである。しかし、作者の目

的はその先にある。その先にあるからこそ、こういう方法を用いたのだ。本格的に描けば数百頁を要するところも比喩を用いれば数行で足る。空蟬・夕顔が仮象にすぎぬのも、先を急ぐ故であろう。

さて、その先とは、いうまでもない。藤壺の懐妊、そして不義の子の出生である。彼女はここで決定的に空蟬から離れる。彼女の未来に、空蟬のような「時の解決」は無い。空蟬の場合は小桂を返せば事足りた。藤壺に返すものはない。否、彼女から出た罪の証しは、時を追って成長し、それある限り消えることはない。作者が冷泉院の顔をことさら光源氏そのままに描写しつづけることに注意しよう。冷泉院はその風貌そのものによって、『源氏物語』の負の領域の深みを明示して止まない。『源氏物語』はその負の領域の深さに相当する正の領域の高さを保持せぬ限り完了しない。この平衡を指す前進が『源氏物語』の巨大指向の根源的理由であることは自明だろう。

ところで、「宮もあさましかりし」で知れる如く、光源氏と藤壺との逢瀬はこれが初回のものではない。藤壺が里に下ったのも「なやみ給ふ事」の故であり、それが「人知れず思すこと」の故であることは言うまでもなからう。彼女はこの時、「三月」の身重であったと作者は記す。この記事はいかにもさりげない。しかし意味するところは限りなく重い。この「三月」となった時点を一応確認しておく。「三月になり給へば」のすぐ上の文が、「暑き程はいとど起きも上り給はず」であるから盛夏の頃と断じてよからう。後にある、

七月なつななになりてぞ参り給ひける

という藤壺参内の記事の「ぞ」は「ようやく重い腰をあげて」の意で

ら、古来言われて来た如く、初段より徹視的には四十九段、巨視的には二条后との一件に着目すべきであろう。特に四十九段の「若草」

「初草」は若紫少女登場の場のキーワードであるし、掠奪後、二条院で共に手習をして遊ぶ場面はさらに濃密な四十九段の影が認められよう。二条后との一件についていえば、この巻の肝心の、光源氏と藤壺の場において、光源氏は「中将の君」と呼ばれていることをあげれば足りようか。作者は明らかに業平のイメージを援用している。その意味では「若紫」なる語は効果的ではある。

しかしながら、この「若紫」にこめられた意味はその程度ですむものではないに思われる。先にいった「手習の場」を引用してみよう。

君は二三日内裏へも参り給はで、この人をなつけ語らひ聞え給ふ。やがて本に、と思すにや、手習・絵など様々に書きつつ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげに書き集め給へり。「むさし野といへばかこたれぬ」と紫の紙に書いて給へる。墨つきのいと殊なるを取りて見居たまへり。すこしちひさくて、

ねは見ねどあはれとぞおもふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりをとあり。

「むさし野といへばかこたれぬ」にしても「草のゆかり」にしても、光源氏にとって若紫の少女が何たるかは言を俟つまゐ。彼女は「草のゆかり」であり、古今六帖の「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故」の「紫の故」に愛する存在である。次巻で作者は、この少女を「かの紫のゆかり」と呼んでいる。少女の意味の確

認である。

光源氏の、この少女への執着は、藤壺への執着と不離一体のものであり、その執着が異常性をおびればおびるほど、藤壺へのそれを逆証する結果となる。光源氏の現在が、「武蔵野の露わけわぶる」状態であることを留意すればなおさらである。

北山で少女を発見した時、あれほど少女に執着した光源氏の胸の内、藤壺が里に退居してから内裏に帰るまでの、およそ三カ月間、少女は存在しない。本文には、「この月頃は、ありしにまざる物思に、異事なくて過ぎゆく」とある。少女は「異事」にすぎぬ。藤壺が帰参した後とて同断である。「秋の末つ方」になり、「六条京極わたり」への道中、たまたま惟光が「故按察使の大納言の家に侍り」と指摘しなければ、少女の家と知らずに光源氏は通過したはずである。またそこで、尼上の「宣はする事の筋、たまさかにも思召しかはらぬやう侍らば、かく理なき齡過ぎ侍りて、必ず数まへさせ給へ。いみじう心細げに見給へ置くなむ、願ひ侍る道のほだしに、思ひ給へられぬべき」という遺言、そして死がなければ、以後の展開もあれほどの進展はみられなかっただろうとさえ思われる。

光源氏が行動に出たのは、そうせずば兵部卿宮の人と少女がなるからであった。光源氏の目にこれが藤壺とダブって見えぬ訳はない。黙っていれば、七月に自分の前から藤壺が去っていった如く、今また雛型が手のとどきにくい場所に去る。つまり、一貫して描かれている如く誰の目からみても「四五年」早い、この異様な組み合わせは、「露わけわぶる」光源氏にとってもはや至上の熱望であって、そうせずば

「藤壺」をとり逃がすという心理の強迫によって事に及んだと考えなければなるまい。この時、「兵部卿宮」の存在はすこぶる効果的である。

「露わけわぶる」光源氏の心理は、藤壺が里にいた夏の日々に緩み、いなくなつた秋にまた張りつめてゆく。大輔の命婦を強要し、音無しの末摘花の許に踏み込んだのは、八月廿余日と明示した作者の意図をくみたい。もし仮に、末摘花が支離疏のようでなく夕顔みたくな女であつたとしたら、掠奪劇は左程の盛り上りは見せなかつたであろう。もっとも、その風貌に光源氏が肝を冷やすのは冬の日の事であるが、初回とて顔を見ないだけ幸福であつたのであつてみれば同じことだ。雪の朝の露顯は、前にも触れたように、紫上の確立と夕顔への訣別のダメ押しである。

若紫巻を巨視すれば、真中の、藤壺と光源氏との密会の場、そして懐妊確定という重大事を原点として、前にも後にも、「露わけわぶる」光源氏の心理の緊張が、その原点から離れば離れるほど昂まつてい、その東軸の極点が「瘡病」であり、西軸の極点が略奪ということになる。全体として、来るところまで来た二人のぬきさしならぬ暗黒の状況を、あどけない少女の登場で、きわめて明朝に描くところに若紫巻の目的があつたと考えられる。作者が、ことさらに「若紫」なる語を選んで巻名としたのは、若い紫草というイメージよりも、若い紫草が根をはっている黒い武蔵野の土壌を表示したかつたからではないか。

春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれかぎり知られず

「春日野」や「すり衣」など問題ではない。ましてや『伊勢物語』初段などものの数ではない。否、「若紫」でさえどうでもよいのだ。この目指すところはこの一首の下句のみである。作者は、「しのぶのみだれかぎり知られず」の響きでもって若紫巻全体を掩つたのだ。

その時、この若紫巻の異常性は、それぞれの異常性と共鳴し、異常の中の平衡に達するだろう。

明石の女の挿話の異常性もこの巻にふさわしいし、雀と遊ぶ少女への執着、そして藤壺との密事と懐妊、少女の掠奪劇。さらには次巻末摘花の風貌も、若紫の余波である。ワキの人々、たとえば良清、僧都、尼、少納言、惟光、兵部卿宮、そして葵上の思念は正氣のありかを示し、光源氏の非日常的行為を浮き上らせる効果がある。ちなみに、末摘花巻の正氣は大輔の命婦である。

(五)

若紫の少女、つまり紫上の登場の意味は、光源氏の内面に即している。若紫の少女、つまり紫上の登場の意味は、光源氏の内面に即している。例えば、あくまでも、藤壺の雛型である。「かの人の御かはりに、明暮のなぐさめにも見ばや」と本文にある通りである。手許に置き、手習よりはじめて、光源氏は藤壺を目指した教育を始める。紫上は、この時、顔さえ似ていれればよい。内面は白紙でなければ素材としての意味をなさない。北山の奥に遊ばせ、ことさらに俗世より遠ざけ、おく、の女とした理由もそこにある。紫上は、生みの母よりはるかにねんねだと尼を敷かせる記事は重要である。『後撰集』巻第十八雜四に、

まだきから思ひこき色にそめむとや若紫のねを尋ぬらむ

という読み人知らずの歌がある。光源氏の内面もまさにこれであろう。「女は心柔かなるなむよきなど、今より教へ聞え給ふ」と本文にある通りである。

さて、その光源氏の教育方針、「女は心柔かなるなむよき」の行手に藤壺があるのであろうか。われわれ読み手にそう信じさせるには、藤壺そして空蟬の系譜からすでに確定されている強い女の意志が障害となる。光源氏がこの方針を堅持する限り、若紫の少女の未来がますます夕顔に接近するだろうことは疑いない。夕顔が「ただ柔和に、とりはづして人に欺かれぬべきが、さすがに物づつみし、見む人の心には従はむなむあはれにて、わが心のままにとり直して見むに、なつかしく覚ゆべき」質の女性であったからである。先に述べたごとく、藤壺を空蟬と夕顔の複合体としてとらえるなら、光源氏は、藤壺の中の空蟬を捨て夕顔を目指していることになる。

思へどもなほ飽かざりし夕顔の露におくれし程のこちを、年月経れど思し忘れず

という末摘花巻の冒頭は、光源氏が瘡を病む前の記事ではあるけれども、若紫巻の直後に置かれたその場所によって、光源氏の、夕顔を目指す意志に限りない説得力を与える結果となっている。そして、これも先に触れた如く、末摘花の風貌そのもの、および末摘花巻末の記事によって、光源氏の夕顔に対する情熱が巧妙に若紫の少女へのそれへと転進せしめられるのも、その方向で考えられるべきであろう。

言うなれば、紫上とは、藤壺の表層から出発しとめどもなく藤壺か

ら遠ざかる存在として規定できよう。藤壺が、信じられる最大の下降を見せるのに反し、その形代は信じられる最高の上昇を見せる。負領域と正領域の平衡のための乖離である。ただし、負領域はすでに提示された世界であったのであってみれば、この正領域が形成する世界の拡がり即『源氏物語』世界の空間にほかならぬ。

が、若紫の登場以後、作者は、当面この正の領域を筆をつくして描こうとはしない。描くのは負の領域ばかりである。六条御息所の怨念も、葵上の思念も決して晴れたものとは言い難い。朧月夜は藤壺の代用にすぎぬ。

されば、正の領域の描出は、読み手の平衡感覚に求めたと言わざるを得ない。紫上への教育が完璧な理想を目指していればいるだけ、紫上以外の登場人物の、人生的苦悶の厚みが厚みを増してゆけばゆくだけ、紫上という唯一の例外を押しあげ上昇せしめる。若紫の少女はいうなれば、読者のために設定された空白であろう。このもはや身寄りを失った可哀相な少女は、光源氏に守られる以上に読み手に守られる。恋する男は「自分の恋人が、父もなく、母もなく、身内の者もなく、友だちもないことを祈る」と言ったのはソクラテス（プラトン『パイロス』）である。われわれ読み手の心理を若紫の少女以上に刺激する存在はない。その心理を作者はつき、そして成功した。

末摘花巻以後須磨巻に至る、いわゆる正調の巻々において、紫上のライバルと目される女君達が、次々と退場せしめられてゆく。巧妙につくられてはいるが、冷静に考えてみれば調子のよすぎる巻々も、かかる読み手の心理に期待しなければ出来ぬ操作であろう。

さて、この若紫の少女、なぜ、藤壺から遠ざかり、夕顔を目指す存在と規定されねばならなかったのか。

私はやはり、桐壺更衣にあると思う。夕顔の死後、死線をさまようほどに悲歎にくれた光源氏の姿が、父桐壺帝が更衣を失ったそれと重なり合つて、われわれ読み手を桐壺巻の原点に立ち戻らせる。愛の挫折から出発した『源氏物語』の、いうなれば見果てぬ夢へ、である。桐壺更衣と藤壺は、確かにその風姿は同一のものであった。が、内面はよほどに違う。前者は「ものおちを理なくせさせ給ふ本性」の弱い夕顔型の女であり、後者は弘徽殿女御と五分以上に対決してひるまぬ強い空蟬型の女である。藤壺の強さは、身を捨てて我子を守る母性の強さとして、賢木巻に十分に描き込まれているところである。

光源氏が、少女の素性をさぐつて僧都に「おしあて」の質問を飛ばし続けていた時、耳にした少女の母の話を見逃すべきではない。

女ただ一人侍りし、亡せて十余年にやなり侍りぬらむ。故大納言、内裏に奉らむなど、かしこういつき侍りしを、その本意の如くもものし侍らで、過ぎ侍りしかば、ただこの尼君一人もてあつかひ侍りし程、いかなる人のしわざにか、兵部卿の宮なむ、忍びてかたらひつき給へりけるを、もとの北の方、やむごとくなくなどして、安からぬこと多くて、明春物を思ひてなむ、亡くなり侍りにし。物思に病づくものと、目に近く見給へし。

これはまるで、桐壺更衣そのままではないか。「物思に病づく」き、「明春物を思ひて」死ぬ女。夕顔、そして更衣の系列から、若紫の少女は登場する。この心理は、せんじつめれば、光源氏の掠奪行為が、

母の運命を生きることから少女を救うことを意味しよう。藤壺を取るという第一義は光源氏のものだけれど、この少女救済の発想は読者の側のものである。作者の力点は、もちろん後者にある。

紫上は、『源氏物語』の世界そのものの中でその人格を形成し、『源氏物語』の世界そのものの中で葬送される唯一の女性である。桐壺更衣から光源氏が登場した如く、桐壺更衣の如き母から紫上は登場する。光源氏は北山の垣間見によって藤壺を発見したが、この僧都の言葉で自己を発見したはずである。事実、尼君に彼は

あはれに承る御有様を、かの過ぎ給ひにけむ、御かはりに思しないでむや。いふかひなき程の齡にて、睡じかるべき人にもたち後れ侍りにければ、あやしう浮きたるやうにて、年月をこそ重ね侍れ。同じ様にものし給ふなるを、類になさせ給へ。

と語る。「同じ様にものし給ふなる」は事実であり、この時の彼の心理に即して言えばこの言葉、真実の声には違いなからう。が、しかし、以後の展開の中にこの言辭を置いてみる時、この時の彼の心理に即して言えばという前提の方が重大であることが容易に理解されよう。「しのぶの乱れ限りしられず」という彼の、藤壺への熱病に浮かされるにふさわしい状況の中で、藤壺を得る情熱が、たまたま大義を発見し飛び付いたといった方が当てよう。

光源氏の、たまたま発したこの言葉は、明らかに読み手に向けられた作者の言葉であろう。われわれがこの言葉を聞く時、われわれは好むと好まざるにかかわらず、首巻桐壺の世界よりこれまでに至る光源氏の履歴を回想せしめられ、その履歴がそのまま若紫の少女に適用さ

れてゆくのを知らしめられる。光源氏を支持する読み手は、その同じ心理の支援を今この少女に注ぐ自己に気付くだろう。女主人公紫上は、その登場の方法からして、光源氏と等価のものである。光源氏が『源氏物語』に存在し続ける限り、紫上は『源氏物語』世界の市民権を持つことができる。その市民権の保証人はもちろんわれわれ読み手である。

光源氏は、自分がなぜこれほどまでに夕顔にのめり込むのか分らない。同様に、この少女にひきずり込まれてゆく自分自身の理由を藤壺故としか知らない。彼にとって、本当に藤壺は絶対であったのか。答は言うまでもないだろう。彼の希求していたものは、藤壺の中の夕顔であり、夕顔の向うの桐壺更衣である。藤壺は、描かれない内だけの理想形であったのであり、いよいよ本格的に描かれる紅葉賀以降薄雲まで、徹底して空蟬の側面が強調され、夕顔の雛型を際立たせ上昇せしめてゆくのみである。罪の証しである冷泉院の成長とともに退場せしめられるという筋立てそのものに藤壺の荷負った意味を認めてよいだろう。彼女もまた、空蟬や夕顔が彼女のそれであった如く、紫上の一つの巨大な譬喩でしかない、と私は思う。

光源氏と紫上の恋は、桐壺巻の原点に根を張る限りにおいて、桐壺帝と更衣の恋の如く周辺から圧殺されてしかるべき質のものである。『源氏物語』はこの心理的不安への挑戦そのものに物語の可能性を求めた作品であり、その死守する世界は、およそ日常性から遠い紫上の清純である。そして、この清純は、様々のものぐるおしい犠牲者の群によって防衛されていると言えよう。つまり、負の領域の厚みが

正の領域の外周、外郭となって、その機能を果すという構図である。『紫式部日記』にある有名な、公任が「わかむらさきやさぶらふ」と紫式部に迫った場面で、作者は自分の胸の裡を披瀝している。

源氏に似るべき人見え給はぬに、かのうへはまいていかでものし給はむ、と聞きゐたり。

光源氏に似た人もいないのに、ましてや紫上がどうしているのかという語気に、作者の若紫の少女に賭けた思念がある。首巻から三帖へだてた若紫巻において、ようやく女主人公を、しかも白紙で登場せしめた慎重きわまる操作一つを按ずるだけで、この思念の重さは知れる。藤壺にとって、この若紫巻は終りの始まりであつても、紫上にとってはまだまだほんの序にすぎないのである。

(注) この小考は、「帯木三帖仮象論上・下」(文芸と批評第2巻9号、3巻1号)、および「母北の方の熱望―源氏物語の出版」(文芸と批評第3巻3号)を承けたものである。